
バカと真面目と召喚獣

いいですとも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと真面目と召喚獣

【Nコード】

N2045Y

【作者名】

いいですとも

【あらすじ】

文月学園の生徒である金城香奈は、体調不良でFクラスになってしまった！？
友達思いな香奈は、仲の良いバカな友人達が起こす騒動に巻き込まれる！

香奈は平穏な学園生活を過ごすことが出来るのか！

坂道と桜並木とプロローグ（前書き）

読んでくださる皆様、見苦しいかもしれませんが、どうぞよろしく
お願いします！

坂道と桜並木とプロローグ

校舎へと繋がる坂道

その両脇を彩る春を感じさせる桜

初めて見た者なら誰もが足を止め、そして嘆息するだろう

その坂道を、息を切らしながら、全速力で駆け上っていく少女がいた

彼女は特に目立つところはなく、しかしとても整った容姿をしていた

彼女の名は金城香奈

香奈は、坂道を登った先にある学校の生徒である

文月学園

それは坂道を登った先にある、とても特殊な学校だ

新設校にして、現在世間で最も話題を呼ぶ新技術“試験召喚システム”の試験採用校

学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られるこの学園

それ故に、多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い

そんな学校に通う香奈は、坂道を登りきり、校門の前に立つ教師に挨拶をする

「西村先生、おはようございます。すみません、遅れました」

「ふむ、金城が遅刻とは珍しいな。何かあったか？」

「家に筆記用具を忘れてしまいました…」

「なるほど。次からは忘れ物をしないようにな。」

「はい！」

会話から分かるように、香奈は教師から信頼されているようだ。

「あ、西村先生！おっはようございまーす！」
「遅刻だ馬鹿者」

∴ 後ろの学園一のバカと違って

「吉井、遅刻だよ…」

「あれ、金城？金城が遅刻するなんて珍しいなあ」

「うん、今日はちよつとね…」「ふうん…」明久と香奈は一年の時
から交流があり、とても仲が良い

その為か、吉井の成績は昔より良くなっている

「ほら、二人共受け取れ」

そう言つて西村が差し出したのは、二つの茶封筒

「ああ、僕は大丈夫ですよ！どうせFクラスでしたし！」

「そんなことないよ…巻き込んだじゃつてごめんね…」

香奈はクラス分けの試験の日、体調が悪く途中で倒れてしまった
明久は倒れた香奈を保健室に連れて行く為途中退室。結果二人は全
教科0点になりFクラス入りが確定となつてしまった

「謝らないでよ、自分の意志でやつたんだから」

「でも、今の吉井ならきつとDクラスには…」

「そんなの過大評価だし自分の意志でやつたつて言ってるじゃん！
金城だつて前日に、僕に勉強を教えてなきゃCクラスにいけないかも
しれないんだから！」

「そんな…」

「金城だつて僕を責めないでしょ！？僕も金城を責めない！だから、

金城も自分を責めないで！」

「うん…分かった！」

明久はとても優しい男だ。だから人が寄ってくる

明久はとても強い男だ。だから意志が固い

明久はとても弱い男だ。だから人の気持ち分かる

バカだが、こんな明久だからこそ、香奈を励ますことが出来たのだ

「二人共遅刻だ！走って教室まで行け！」

西村の声が響く

『はい！』

二人の重なった声が響く

二人が消えた校舎を見ながら西村が呟く

「頑張れよ、二人共…」

西村の小さな声は、春の微風にかき消された

坂道と桜並木とプロローグ（後書き）

楽しんで頂けましたか？

出来れば感想よろしくお願いします！

批判も受け付けています！

これからもどうぞよろしくお願いします！

バカと仲間とFクラス（前書き）

すみません、島田アンチです…

バカと仲間とFクラス

「うわ…。これが教室…？」

「凄いねえ…。」

二人は思わず足を止める

それもそのはず、彼らが見ているのはAクラスだ

Aクラスは設備が充実していて、教室というより、ホテルという方がしっくりくるぐらいである

目眩を覚える程の教室だ

「あれはシステムデスク…。あれは個人クーラー…。」

「吉井、あれつてもしかして冷蔵庫…？」

「もしかしなくても冷蔵庫だよ…。」

「しかもあの人たち…。あれを当然の様に扱ってる…。」

「仕方がないよ…。社会じゃ、成績が全てなんだし…。」

「…もう行こ！なんか気分悪くなってきた！」

「だね」

返事をしながら明久は、思わず苦笑いを浮かべていた

「うわ…。これが教室…？」

「凄いねえ…。」

思わず、先程と同じ言葉を吐いてしまっくらい衝撃的な教室がそこにはあった

それもそのはず、彼らが見ているのはFクラスだ

思わず目を覆いたくなるほど汚い外観

さらに少し異臭がする
違う意味で目眩を覚える程の教室だ

「なんか違う意味で気分悪い！」

「もういいや…。さっさと入ろう？」

「うん」

そして明久は異臭のする戸を開ける

「すみません、遅れちゃいました」

「ん？明久。お前Fクラスなのか？」

「あれ、雄二？雄二もFクラスなの？」

「おうそうだ。点数をちょっと調整してな。俺はこのFクラスの代表だ。」

「へえ、そうなんだ。」

明久の後ろから、ひょいと出てきた香奈が口を挟む

「坂本…何が目的？」

「うお！金城！？なんでここに！」「Fクラスだからだよ…。ちょっと体調が悪くてね…。それで明久も…」

「ああ分かった…それ以上言わなくて良い」

「うん…」

雄二は何があつたかを察し、香奈にそれ以上を言わせなかった

「それはそうとして。本当になんでFクラスに。しかも面倒くさそうな代表に。」

明久の問いに雄二は口元を釣り上げる

「そりゃあ代表って言ったら、一つしかないだろ」

「やるの？坂本。試験召喚戦争を」

「ああ勿論だ！」

試験召喚戦争。通称、試召戦争

試召戦争とは要するに、設備を賭けた、成績で戦う成績である上位クラスが下位クラスに負ければ、設備を入れ替えることになる。また、下位クラスが上位クラスに負ければ設備を一段階落とされることになる生徒たちはより良い設備を求め、成績を向上する。それが文月学園の試召戦争の目的である

「まあそれは後で聞くよ。雄二、席は決められてるの？」

「いや、自由席だ」

「じゃあ吉井！あっちに座ろ」

「はいはい」

「さて、じゃあ俺もそろそろ座るかな。明久、隣良いか？」

「良いよー」

「いや金城が答えないでよ。別に良いけど」

三人が席についてすぐに、教室の戸が開いた

「えー、おはようございます。Fクラスの担任を務めます…」

担任らしい教師は、薄汚れた黒板に視線をやり手を伸ばそうとして…視線を皆の方に戻した。

「福原慎です。よろしくお願いします」

その光景を見て明久たちは驚愕する

「おいおい、チヨークすらないのかよ」

「ここまで酷いとは…」

「諦めるしかないよ…」

「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば、申し出てください」

「むしろ不備しかないだろ…」「しっ！」

「俺の座布団、綿が入ってないんですけど」

「我慢してください」

「俺の卓袱台、脚が折れてます」「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」

「窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

「学校の悪意が見えるよ…」

「ここまで差別されるとなんか…」

「気持ち悪い…」

この学校の圧倒的な学歴主義に香奈は嫌悪感を催す

「では必要なものがあつたら、極力自分で調達する様にしてください。それでは、自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人からお願ひします」

福原の言つとおり、廊下側の一番最後に座っている生徒が立ち上がった

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属してある。今年1年、よろしく頼むぞい」

「あ、秀吉だ」

「こいつも使えそうだな」

「坂本…凄く悪そうな顔してるよ…」

秀吉は男とは思えない程の可憐な姿をしている
秀吉も一年の時から明久たちと交流があり仲が良い

「……土屋康太」

康太は全体的な成績は悪いが、保健だけは他者の追随を許さず、保健の成績は学年で一位を欲しいままにしている
彼もまた、一年の時から明久たちと仲が良い

「ムツツリーニもだ…」

「こいつもまた…」

「坂本…」

「でもやっぱり女子がいないねえ」

「もしかして、女子は私一人…?」

「おい、ちょっと待て。次は女子みただぞ」

「……です。海外育ちで日本語は会話ができるけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

とある女子は一旦区切り、明久をちらりと見てから一言。

「吉井明久を殴る事です」

「し、島田さん…」

彼女の名前は島田美波

一年の時から明久たちと交流があり仲が良い
ある一名を除いて…

「ハロー」

「ははっ…」

明久は不吉な言葉に背筋を凍らせていた

隣で雄二は苦笑い

そして香奈は怒りに震えていた

そして香奈の出番が回ってきた

「金城香奈です。趣味は色々、特技も色々。嫌いなことは差別、嫌いな物は爬虫類、嫌いな者は暴力を振るう人です。」

香奈は美波を睨みながら、そう言い放った

バカと仲間とFクラス（後書き）

これからも頑張りますので、よろしくお願いします！

嫌悪と偽悪者と学年次席（前書き）

香奈だけじゃ力不足だと思い、オリキャラを一人増やしました！

結果、オリキャラ無双になってしまいました…
反省しています…

嫌悪と偽悪者と学年次席

睨まれた美波は、香奈に憎しみの籠もった眼で睨み返した
二人の間に流れる不穏な空気に、Fクラスは静まりかえる

香奈と美波はお互いの存在を快く思っていない
美波は、いつも明久の近くにいる異性である香奈を、恨めしく、妬
ましく思っている

香奈は、大事な友人である明久に、いつも理不尽な暴力を振るう美
波を、ただひたすら嫌悪していた
この空気を変えたい明久は、二人の間に割って入る

「ほらほら二人とも！僕が自己紹介するからちゃんと聞いて！」

明久に言われ、二人は渋々視線を他に移す

しかし、睨み合いが終わったからといって、クラスの空気が変わる
わけではない
空気を変えようと必死な明久は、軽く咳払いをし、練りにねって考
えた渾身の自己紹介をする

「え〜っと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださ
いね」

そう、渾身の自己紹介だ

『……………』

効果があるとは限らないが…

「うっう…」

「頑張ったな、明久…」

「私が呼んであげるからそれで我慢して、ダーリン」

「そういうことじゃないんだ…。そういうことじゃないんだよ…」

どうしてあんな自己紹介をしたのか、良く分かっていない香奈だった

そのとき突然戸が開き、少し高めの男の声が響いた

「すみません 遅れちゃいました」

声を発した男は、背が少し低めで、これといった特徴のない黒髪と、いかにも普通の男子高校生であった

彼の微かにだが放つ、異様な空気を除いては…

「ああちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので、端梨くんもお願いします」

「分かりました 僕の名前は端梨人巻と言います！僕は自分のことを、素直で純粋な人間だと自負しています！これから一年、同じクラスで頑張りますよう！みなさん、よろしくお願いします」

人巻は言い終えると、誰の反応も待たず、明久の席の前まで歩き、そして座った

「やあダーリン」

「聞こえてたの!？」

「うん」

「はあ…。それよりさっきの自己紹介、何が素直で純粋な人間だよ。全然違うじゃないか」

「そうかな？僕は自分のことを、素直で純粋に嘘を吐く人間だと自

負しているよ」

思わず明久は溜め息を吐く

「そんなことより人巻。なんでお前がFクラスなんだよ。お前ならBくらいに行けたろ」

「それは君もだろ？雄二くん。僕の場合はちょっと暇だったんでね。面白い人たちが居そうだからっていう理由しかないよ。明久ちゃんたちがFクラスなのは分かってたしね。同じ教室でテストを受けてたから」

「なるほど、お前らしい」

「だろ？僕のモットーは名前の通り、『恥も無く人を巻き込む』だからね」

「親はそういう意味で名前を付けたんじゃないと思うんだけど！」

「あははっ そうだね、金城さんの言うとおり！」

「もうっ！」

香奈の反応を見て、人巻は笑い声を上げる

明久たちもつられて笑い始める

人巻は一通り笑い終えたようで、一息を入れてからまた口を開く

「そういえばさっき、珍しい人が遅刻してるのを見たぜ。まあ、僕も一応急いでいたから、走って抜かしちゃったんだけど」

「ふーん。その子って誰？」

「えーっとねえ」

人巻が名前を言おうとしたその時、戸が開いた

そして、桃色の長い髪をなびかせた女子生徒が、息を切らしながら入ってきた

「ほら、あの子だよ」

その姿に、大半の生徒が、驚きを通り過ぎて声が出ない様な状況に陥っていた

「え…。あの子ってまさか姫路さん!？」

明久が驚きの声を上げる

「え、よ、吉井くん!？」

姫路と呼ばれた女子生徒も、驚きの声を上げる

「違うよ、ダーリンだよ!」

人巻は余計な茶々を入れる

「人巻は余計なことを言わないで!」

至極真つ当なツツコミである

「ああちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんをお願いします」

「凄いな。人巻のときと名前のところ以外、一語一句同じだよ…」

「作者が楽しってるだけでしょ?」

「メタ発言は止めて」

「その発言もメタ発言だけだな」

「三人とも!」

『はい…』

声を荒げて話し合う四人
実に迷惑である

「あの…、もう良いですか…?」

「はい！大丈夫です！」

「ええと、姫路瑞希と言います。よろしく願いします！」

「はいっ、質問です！」

「あ、はいっ。なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

「先生！イジメは良くないと思います！」

『違うから!!』

傍から見れば人巻の言うとおり、イジメを予感させる質問ではあったが、ほぼ全員がそう思っていた事だった

瑞希は容姿も人目を引く程で、テストでは一桁の順位に必ず名を連ねている学力の持ち主でもある

当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった

「わたしは振り分け試験中に熱を出しちゃって…」

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？あれは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

「分かるかい明久ちゃん。僕らはこいつらと同レベルなんだぜ」

「悲しいこと言わないでよ…」

明久たちは無性にやるせなくなった

「で、ではっ、今年一年よろしくお願いします！」

瑞希は逃げるように、香奈の前の席に着いた

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしまっ

「き、緊張しましたあ…」

「大丈夫？姫路さん」

「よ、吉井くん！だ、大丈夫、です！」

「そっか！良かった」

そして明久は瑞希に微笑みかける

ここまで天然たらしという言葉が合う人物は、他にいるだろうか
思わず瑞希は吐息を漏らす

「流石だね、明久ちゃん！そこにシビれる！憧れるう！」

「何が!？」

「吉井ってやっぱり凄いね…。やり過ぎないようにね？後ろから刺
されちゃっよ？」

「なんで!？」

「本当に気づいてないんだな…」

「何に!??」

瑞希を交えて五人で騒いでいると、前の方から何かを叩く音がした

「はいはい。その人たち、静かに」

福原が注意を始めるが、叩いた教卓が音を立てて崩れてしまった

「してください…ね？」

本人としては、軽く叩いたつもりだろう

しかし、壊してしまった事実は変わらない為、少々気まずそうな顔をする

「えー。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしてくださいね」

福原は気まずい顔をしながら、教室を後にする

「…ねえ、雄二。ちよつと良い？」

「別に構わないぞ」

「じゃあちよつと外で」

「真剣な話か？」

「うん」

「分かった」

「何？愛の告白？」

人巻の適当な戯れ言をスルーし、二人は真剣な面持ちで教室を後にした

嫌悪と偽悪者と学年次席（後書き）

！
見苦しかったかもしれませんが、これからもよろしくお願いします

意地とFクラスと試召戦争（前書き）

感想をくださった方々ありがとうございます！

これからも精進していくのでよろしくお願いします！

不快になる内容が入っていますが、読んでいただければ嬉しいです

…

意地とFクラスと試召戦争

「それで、話しててなんだ？明久」

「うん。さつき、試召戦争の話をしたじゃない？」

「ああ」

「目標をAクラスに変えて欲しいんだ」

明久の発言に雄二は目を細める

「…まゝた誰かの為か？」

「そういう訳じゃないんだけど…」

雄二の発言に明久は目を泳がせる

「嘔吐くな。じゃなきゃお前が試召戦争なんて言い出す訳がないだろ」

「いや、本当だよ！FクラスとAクラスの教室を見たらさ！」

「さつきと理由を話せ。金城も姫路もここにはいねえよ」

「どうして分かったの…？」

「顔に出るんだよ。お前は」

「そうなんだ…」

明久が一人納得していると、雄二がさつきとしろと急かし始めるので、明久は理由を話し始める

「姫路さんって体が弱いじゃない？だからこんな環境の悪いところじゃ、体調を崩しちゃうかもしれないし…しかも、元々Aクラスに行ける実力があるのにこんなんじゃない可哀想でしょ？」

「ああ、確かにそうだな。で、どうして金城の為なんだ？」

そっちが本題と言わんばかりの口調で、明久に尋ねる
それは仕方がないだろう。明久が、どうして姫路の為に頑張るかは
想像がついていたからだ

雄二の問いに、明久は口を開いていく

「金城がさ、Aクラスの人たちを見て不機嫌になってたんだよ…」

「ほう？それはどうしてだかお前には分かるか？」

「…多分だけど良い？」

「ああ勿論だ。聞かせてみる」

「えっとさ…、Aクラスの人たちってAクラスの教室を勉強で勝ち
取ったんだよ…？」

「ああそうだな」

「でもさ、世の中勉強が全てじゃないでしょ…？運動を頑張る人も
いれば、秀吉みたいに演劇を頑張る人もいる…」

「……」

「けどこの学校は、勉強だけで教室の設備を決められて他の努力
を認められない…。そしてAクラスの人たちはその設備を当然の様
に使っている…。そこに腹が立つたんじゃないかな…」

「要するに、他の人も色々と努力をしているのにそれを認めず、勉
強だけが全てだと信じているAクラスの奴らとこの学校に腹を立て
てるってことか？」

「…多分ね」

「それは詭弁だな。そう思っている人も少しはいるかも知れないが、
全員がそう思ってる訳ではあるまい。僕はそう思うね」

いきなり現れた人巻がそう言った

「お前、いつからそこにいた…」

「だが金城さんの意見にも一理ある。そう思われるほどAクラスの人たちの態度は大きかった。僕がさっき見たときなんて、優雅に力ツプで紅茶を飲んでたぜ」

「聞けよ！」

「ん、なんだい？」

「…はあ、もういい。安心しろ明久。俺の狙いは最初からAクラスだ」

「へ？EクラスとかDクラスじゃないの？」

「ああ、目的はお前と一緒にだ。学力だけが全てじゃないってことを証明したくてな」

雄二が口の端を吊り上げる

「証明したいなら論文でも書けば？」

人巻も口の端を吊り上げる

「はいはい、人巻も人を煽らない」

「僕の生き甲斐を奪わないで！」

「嫌な生き甲斐だな…。話しも終わったし二人とも、中にはいるぞ」

そして三人は教室の中へと入っていった

「三人とも遅かったね。何してたの？」

香奈が不安そうに三人に尋ねる

「ああそれはね、パンツの話をしてたんだ」

「へ？」

思わず香奈は間の抜けた声を出す

「ちよっ！人巻！勘違いされる様なこと言わないでよ！」

「僕たちはこれでも男子高校生だからね。パンツに夢中なんだよ。やっぱり時代はパンツだね。口に出すだけで興奮するよ。パンツだって他の服と同じでただの布なのに、どうしてあんなに興奮するんだろうね？人類の永遠の謎だよ。この謎が解けたなら或いは、世界中の戦争がなくなるかもしれないね。やっぱりパンツは凄いね。Yesパンツ！おっと話しが逸れたね。『どんな話しをしてたか』だよね。主に話してたのはパンツの色の話しかな？どの色もそれぞれの魅力とエロスが宿っているよね。十人十色とは正にこのこと。こちらからは十人十色ではなく、十パンツ十色にするべきだね。そっちの方が絶対に意味が通じやすいもの。おっと、また話しが逸れてしまったね。いやあ失敬失敬。パンツの話しを始めると我を忘れちゃうんだ。饒舌にもなるね。そう、色の話しだったね。明久ちゃんとうん。雄二くんは、白に一番魅力を感じるみたいだね。うん、その気持ち凄く分かるよ。白は凄く清楚な感じがするよね。汚れなき乙女って感じだよ。そしてその汚れないものを自分色に染める。そそのね。唾液が湯水のように溢れ出てくるよ。だけど僕はやっぱり黒が良いな。何？とてもエロい感じがするって？バカやろう！フザケたことを抜かすなよ、このド三流が！！エロそうな人が身に着ければ確かにエロく見えるさ。だけどエロくなさそうな人間が身に着ければ黒もまた清純な色となる！このエロスと清純の二刀流。完璧じゃないか……。だがパンツには……」

『なげえよ！！！！』

明久と雄二の絶叫が、Fクラスに響いた

「おいおい、あまり大声を出すなよ。周りに失礼だろ？」
「ずっとパンツの話しを聞かされる方の身にもなれ！！」
「…ああなるほど、アソコがハイパーフルバーストということか」
「違うわ！」
「吉井、本当にパンツの話しをしたの…？」
「人巻の嘘に決まってるでしょ！！？」
「ウルサイですよ、皆さん」

いつの間にかに帰ってきていた福原に怒られ、教室はまた静かになり自己紹介が再開した

自己紹介は順調に進んでいき、最後の雄二の番になった

「えーと、坂本君、君が最後ですよ。クラス代表でしたよね？前に出てきてください」
「了解」

そう言い雄二は立ち上がり教卓の前に向かった

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

そしてここで雄二は一つ咳払いをし、声の調子を調える

「Aクラスは超豪華待遇らしいが……不満はないか？」
『大ありじゃああああ！！！！』

Fクラス全員が叫び、教室に声が響きわたる

確かにここまでの差だと、不満がない方がおかしいだろう

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ」

「いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！」

「Aクラスだって同じ学費だろ！？」

「女子高生のパンツがみたい！！」

「改善を要求する！！」

「ああ、そこで代表としての提案だがFクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！！」

こうして戦いの火蓋は切って落とされた

意地とFクラスと試召戦争（後書き）

不快になってしまった方、本当に申し訳ありません…
自分勝手ですが、これからも読んでいただければ嬉しいです…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2045y/>

バカと真面目と召喚獣

2011年11月8日06時04分発行